

盆栽ラップソデイ

ペンネーム

鵜川うかわ

京子

(水谷

京子)

■登場人物表

平星楓ひらほしかえで(26) 会社員

井上陸りく(30) 盆栽センターの研修生

平星耕吉(85) 楓の祖父

平星博(57) 楓の父

平星優子(55) 楓の母

平星幸代(82) 楓の祖母

宮崎梨花(26) 楓の友人

斉藤麻友(26) 楓の友人

和泉達郎(53) 盆栽センター長

夫 1 40歳代

妻 1 40歳代

「道（夕）」

農家と新しい住宅が入りまじる住宅地。その中に、田んぼや盆栽畑、オリーブ畑が点在する。植えたばかりの稲の苗がきれい。その前を黒髪をなびかせ平星楓（26）が自転車ですっそうと走る。

② 「盆栽センター」前の道（夕）」

楓が自転車で走る。

③ 耕吉の家・前（夕）」

平星耕吉の平家があり、隣りの敷地に博の家が建っている。平星耕吉（85）が前庭の一面に植えた黒松の盆栽二十本を、剪定している。楓がやってきてそこで自転車から降りる。

耕吉

「おじいちゃん、ただいま」

楓

「盆栽、好きやね」

耕吉

「あ、この松だけをもう二十数年、手

楓

「あ、博に、後で話があるいうとってく

楓

「了解」

楓

「隣の家の庭に自転車をひいて入る。」

④ 博の家・外観（夕）」

二階建て。塀には「平星」の表札。

⑤ 同・前庭（夕）」

平星博（57）が車の中の釣具を片付けている。楓が入ってきて、車の横に自転車をとめる。

楓

「ただいま。お父さん、おじいちゃんが

博

「話があるって。どうせあの盆栽をお前が

やれゆう話やろ。松とか興味ないわ」
 楓 「確かに、お父さんにセンスがあるとは思えんわ」
 博 「だろ？ それにあんなしろうとが作つたもんなんか、なんの価値もないわ」
 楓 「お、お父さん……」
 楓、博の後ろを見て目が点になっている。
 そこには、盆栽ハサミを手にした耕吉が仁王立ちしている。
 耕吉 「価値がないとはなんだ！ わしが丹精込めた盆栽を。あれはな、売れば一鉢二十万はするぞ」
 博 「このあたりの家を見てみい、もう盆栽やっつてるとこなんかあるか。昔とは違うんや」
 耕吉 「国分寺は盆栽の里や、センターもできたし、国分寺で盆栽せんかったら、盆栽はほろびるぞ！」
 耕吉は、興奮してハサミをかざし、その反動でよろける。
 楓、耕吉をささえ、
 「あぶない！」
 と、ハサミを取り上げる。
 耕吉の家から、平星幸代(82)が杖を持って小走りやってくる。
 平星優子(55)も、慌てた様子で博の家から出てくる。
 幸代 「お父さん！ 心臓、悪いんだから、落ち着いて」
 耕吉 「(小さく) このバチ当たりが」
 幸代、耕吉に杖を渡し、息を整えさせる。
 楓 「おじいちゃん、それなら、盆栽センターに頼んでもっと盆栽を広めてもらったら」
 耕吉 「センターか、わしもまだ行ったことないな。JAがやっつてるから間違いないやろ」
 幸代 「でも足も悪いし……」
 博 「楓、お前、一緒に行つてやれ」
 楓 「(小声で) なんで私が……」

博 「(大きな声で) 楓は車も持ってるし」
耕吉 「すまんの、楓」
楓 「う、うん。じゃ、一回だけ」
耕吉 「あそこの盆栽には負けんぞお」
そつとため息をつく楓。

9 青空に盆栽畑が広がる光景
メインタイトル『盆栽ラップソング』

10 博の家・外観
二階の出窓から白のレースのカーテンが見える。

11 同・二階楓の部屋

部屋にはラップのアニメ『ヒップノシマイク』のポスター、声優のDVD、CDなど、雑然としている。

楓、斉藤麻友(26)、宮崎梨花(26)とジュースなど飲みながら、
楓 「というわけで、我が家は盆栽戦争勃発よお」

梨花 「しぶいな」
麻友 「うちは婚活しろとか、めっちゃうるさい」

楓 「え、二十六でもう婚活？」

麻友 「若いうちは条件がいいからって」

梨花 「恋愛もめんどくさいのに、結婚なんて考えられない」

麻友 「恋愛がめんどくさいうと、ほんとに好きな人に出会ってないだけ、って必ず言われる」

梨花 「『ほんと』ってナニ？って話よね」
楓 「私たちのことは放っておいて欲しいよ。迷惑かけないように生きていくから」

12 同・リビングダイニング

優子と博がダイニングテーブルで。

優子 「コーヒーいる？」

博 「うん。今日も上、オタクのふたりか」
優子 「麻友ちゃんはアニメーターで、梨花ち

博 「んとはコスプレイヤ、ふたりともちゃ
 優子 「うじや、彼氏はなしか、日曜につるんでるよ
 博 「きそう、だから恋愛に臆病なかな、ぱりアトピ
 博 「じやない。こつちやがる男なんか、く奴
 優子 「優子の博と自分の話よ」
 優子 「転勤で小学校を2回変わったのもかわ
 博 「い、そうだったわ」
 博 「な、お前は、すぐかわいそうって、過保護
 優子 「娘なの。考えたさすぎなのよ、ひとり
 博 「ゆ、ずりなのよ。：：いたい乾燥肌だってあなた
 博 「博、背中をかきな、ら、行かないと」
 博 「博、あ、オレ、釣具屋、を飲みそそくさ
 優子 「と、唇をとがらせ、二階を見る。」

10 同・二階楓の部屋

梨花 「楓、梨花、麻友、話の続き。
 楓 「か、なんでもみんな恋愛したいのか、マジわ
 楓 「楓、D V D をひとつ取りながら、
 楓 「い、いのね、好きなきことをして生きれば
 麻友 「あ、『ヒプノシスマイク』の新作！」
 梨花と麻友、「見せてー」と手を伸ばし、
 テンションが上がる。

11 走る軽自動車

12 軽自動車・内

井上「え？ ああ、名前。ちよっと変わった
形の木だよ。ね。」
楓「ふうい。」
井上「ふうい。」

楓「ふうい。」
井上「ふうい。」

楓「ふうい。」
井上「ふうい。」

井上「ふうい。」
楓「ふうい。」

18 同・事務所・前

楓が帰ってくる。

耕吉「和泉、ここにこしている。」

和泉「近隣の、できれば若い人向けに盆栽フ

エスをしようと思います。平星さんが主

催してくれるそう、心強いです。」

楓「盆栽フエス、心強いです。」

耕吉「盆栽フエス、心強いです。」

楓「盆栽フエス、心強いです。」

耕吉「盆栽フエス、心強いです。」

楓「盆栽フエス、心強いです。」

耕吉「盆栽フエス、心強いです。」

楓「盆栽フエス、心強いです。」

楓「おじいちゃん！」
耕吉「わしひとりじゃ、足も悪いしなあ」
楓「もうそういう時だけ年寄りぶるんだか
ら：：わかつた、送り迎えだけよ」
耕吉「すまんあ」
楓「困った顔で左の腕をしきりにかいて
いる。」

19 博の家・リビングダイニング（夜）

博「優子、楓が手巻き寿司を巻いて食べ
ながら、」
優子「あんたにイベントなんかできるわけな
いじゃない」
楓「そうだけども、手伝えていうから」
博「おやじのいつもの世話好きだ。勝手に
させとけ」
優子「フェスってナニ。音楽かなんかやるの？」
楓「フェスティバルだからお祭り？ 盆栽
を売ったり、手入れの仕方教えたり、
植木みたいなもんじやない」
博「おやじ、顔広いから近所の人ばかりか
もな」
優子「そのからいならいいか」
楓「初夏だから暑いけどね」
博「あー、また具が足りないよお」
優子「いる具は梅干しだけ。ご飯とノリをちよう
どよく終わらせるのって」
博「最後の梅干をのせて食べ、すっぱい顔の
博。」

20 稲がすくすくと伸びている

21 博の家・リビングダイニング

楓がソファでアニメを見ている。
耕吉がリビングのドアを開け、入ってく
る。
楓、テレビを消し、

楓「何、おじいちゃん」
耕「楓、これ見てくれんか」

書いてある。そこに毛筆で

「一、盆栽の展示即売会

一、競り市

一、盆栽診断所

一、盆栽作り体験」

楓「フェスの企画案？ いいじゃない。さ

すがおじいちゃん！」

耕「（まんざらでもなく）そうか、センター

長さんと相談したんや。でも、これで若

いもんが来るかな。何か足りん気がする」

楓「そんなことないよ。これでポップなチ

ラシを作って配れば、きっとみんな来る

よ」

耕「うーん、そうかな」

博「博がやってくる。博、紙をとり、

「これじゃ、ありきたりだな。来てもし

いさんだけだよ」

耕「お前は。それならなんか考え

てみる」

博「オレは盆栽、興味ないし。だれか若く

て盆栽好きに聞いてくれよ」

楓「若くて盆栽好き……」

22 盆栽センター・事務所

楓「楓が事務所のドアをのぞくと和泉が受付

にいる。おじいちゃんにはフェスでお世

和泉「やあ、おじいちゃんにはフェスでお世

話になった」

楓「そのフェスのこと、井上さんとお話し

たいんです。お仕事中だけど、今、いい

ですか」

和泉「ああ。水やりしてるからちょうどいい」

楓「ありがとうございませう、」

和泉「あ、水やりしてるからちょうどいい」

楓「あ、水やりしてるからちょうどいい」

和泉「あ、水やりしてるからちょうどいい」

楓「あ、水やりしてるからちょうどいい」

和泉「あ、水やりしてるからちょうどいい」

楓「あ、水やりしてるからちょうどいい」

和泉「あ、水やりしてるからちょうどいい」

つか連れてってやってよ」

楓「私が？」

和泉「あいつ、研究所とこの往復だけで、

何が楽しいのか、こっちが心配になるよ」

楓「盆栽が好きって言ってましたよ」

和泉「でも、せっかく茨城から香川に来たの

にねえ。車もないから不便だし」

楓「うーん、香川：：うどん巡りかな？」

楓「首をかしげながら行く。」

23 同・盆栽展示場

井上がひとつひとつ丁寧に水をやってい

る後を、楓が後をついていく。

楓「それで、井上さんに力になって欲しい

んだけど」

井上「ここでするなら当然手伝うよ」

楓「いや、それだけでなくて、何か若い人

が関心をもつような企画がないかな、と

思ってた」

井上「まだ見習いだし、このこともよくわ

らかないから」

楓「そうかもしれないけど。：：もし何か

あったら、私にラインしてもらえますか」

井上「いいけど：：」

楓「じゃ」

お互いスマホを取り出し、ふりふりする。

楓「来ました。陸さんですね」

井上「はい、楓さん」

楓「あ、井上さんはおうどん好きですか？」

井上「ふつう」

楓「ですよー」

井上、首をかしげながら松に水をやって

いる。

楓、松を見て「あっ」と思った様子。

楓「松、松ですよ。私が高松でいちばん好

きなところ！」

井上「（首をかしげ）？」

24 盆栽研究所・井上の部屋（夜）

全体が白で統一され、無駄がなくすべて

きちんと整理されている。
ひとつだけ松盆栽が飾ってある。
井上、ベッドでスマホからイヤホンで
日本語ラップ(『ライムスター』のような)
を聴いて、小さく口ずさんでいる。

25 石田事務機株式会社・総務課

時計は十二時半。昼休みで、部屋にはあまり人がいない。
制服姿の楓が、机のパソコンで「栗林公園」を検索して画像をいろいろ見ている。思いついて、検索画面に「茨城県」と入れる。
楓、画面を見てにこにこしている。

26 栗林公園・正門

楓と井上が入っていく。
「栗林公園」と石碑がある正面入口から、
楓 高松でいちばん好きなのが栗林公園なんです。春の桜、秋のモミジ、冬の枯れた感じも好きです。でも、中でもいちばんすごいと思うところに案内されます」
井上も広い庭や木を見て圧倒されている。

27 同・箱松の所

ふたり、屏風松や低い箱松のあるところに来る。
楓 「この箱松、すごくないですか。専門的なことはわからないけど、盆栽の技術を結集したって感じで、職人さんのどうだ！という意気込みを感じます」
井上、下から、上から、細部にわたって見入っている。
井上 「うーん、すごいよ、この樹芸」
井上はさかんにスマホで写真をとっている。

28 同・掬月亭・庭

楓と井上、庭の松の前にいる。

楓 「楓がリーフレットを見て、

栽を庭に植えたところ大きく成長した五

葉松、だつて」

井上「写真、撮つてもいい？松の横に並んで」

楓「あ、いいけど」

井上「緊張した顔で松と並ぶ。」

楓「これ、写真を撮る。」

井上「これで大きさがよくわかる」

楓「……」

29 同・同・茶席

楓と井上、お茶とお菓子を前に池のある

景色を眺めながら。

井上「びっくりしたよ。こんなところがあるな

んて。高松に来てよかつた」

楓「いがつぺ？」

笑う井上。

井上「んだ。うちは古河こがで東京に近いから、

あんまり茨城弁は使わねえよ」

楓「そうなんだ。なんで、高松まで来たの。

関東にも盆栽はあるでしょう？」

井上「(茨城弁で)オレ、ほんとはラップやり

たくて、高校中退して東京に出たんだけど

んど、ぜんぜん芽がなくて。警備のバ

イトしてたら盆栽のイベントがあつて、

これだ！と思つて」

30 盆栽イベント会場(回想)

立派な松盆栽の前で我を忘れて見入つて

いる井上。

31 栗林公園・掬月亭の茶席

井上、遠くを見るように、

井上「(茨城弁で)それが高松の盆栽園だつた

つぺ。オレは人ができることができねで、

バイトもよくクビになつたさ。あれこれ

よくできね。ひとつのことをずつとして

楓 井上 楓 井上 楓 井上 楓 井上 楓 井上
 がたい。盆栽だら何時間でも見てられる気
 「向いてるかも」
 井上 井上「茨城弁で」時間軸があうっぺ。盆栽
 をじつと見てるとこうして欲しいって声
 が聞こえるべ
 通つてい前の池を観光客を乗せた和舟が
 聞くん？
 井上 「あ、日本語ラップが好きだから」
 井上 「へえ、から入ったんだけどね」
 楓 「アニメから入ったんだけどね」
 井上 「はアガルなあ」
 楓 「私も好き！ラップなのに和風なのが
 たまには、けっこうリズムが新しいこと
 井上 「あ、は、話が盛り上がり、ハイタッチす
 たり、ん、だよね」
 ふたり、話が盛り上がり、ハイタッチす
 る。

32 セルフのうどん店・外観

33 同・内

楓 井上 楓 井上 楓 井上 楓 井上 楓 井上
 切りしてゐる。ぎこちなくも楽しそう。湯
 × カウンター席でうどんを前にした楓と井
 上。 ×
 井上 「井上、うどんをすすり、
 「うまい！来たの？ほんとに盆栽以外
 興味ないのね」
 井上 「直しうな、テッキ、さりげなく調味料の位
 置を直しうな、テッキ、さりげなく調味料の位

34 耕吉の家・茶の間（夜）

耕吉は、『盆栽フェスティバル』のチラシを見て、「うーん」と、考え込んでいる。

幸代が来て、

幸代 「あなたももうお風呂に入ったら」

耕吉 「何か足りない気が」

幸代 「そうですか、私はいいと思いますよ」

耕吉 「急に胸を押さえ「う、うう」っと

苦しみます。

幸代 「かよる。」

幸代 「あなた、だいじょうぶ」

と背中をさする。

幸代 「苦しみます。」

救急車の音が重なる。

35 県立中央病院・外観

36 同・手術室の前

幸代、博、優子、楓が集まって心配している。

幸代 「おやじ、不整脈、あったからな」

に何かあったら「

と、ソファに座り込む。

優子、隣に寄り添う。耕吉をのせたスト

レソ、そこに看護師たちが来る。

幸代 「あなた、大丈夫！」

耕吉 「は、大丈夫！」

楓 「か、楓は、大丈夫！」

耕吉 「か、楓は、大丈夫！」

楓 「か、楓は、大丈夫！」

博 「ま、ペースメーカーを入れるだけだから
一時間くらいで終わるらしい。(ひとり
言で)おやじも年だしな―」
左の腕をしきりにかいている楓。

37 博の家・リビングダイニング(夕)

優子がソファでフェスのチラシを見てい
る。
楓が歩きながらスマホで電話をしている
。：：麻友、一生のお願い、フェスは今
度の日曜、あと、二日しかないの：：ウ
チで待ってるから―
楓、スマホを切る。
優子 「あんたは人の前に立ってなんかしたこ
とないじゃない。無理しないでセンチタ
ー
長さんにまかせなさい―
「だって、おじいちゃんど約束したから、
このままじゃ、だれもお客さん来ないよ」
楓、またスマホをかける。
楓 「あ、梨花、一生に一度のお願いがある
の：：―
優子、額にしわをよせ楓を見ている。

38 県立中央病院・病室(夜)

耕吉 ベッドの上で半目で幸代にゼリーを含ま
せてもらって耕吉。
耕吉 「うーん。もつとちようだい」

39 博の家・二階楓の部屋(夜)

出窓にカエデの盆栽がある。
楓、麻友、梨花の三人でフェスのチラシ
や看板の写真を見ている。
楓 「チラシは自治会を通していき渡ってい
るから、おじいちゃん知り合いは来て
くれないと思うのよね。でも若い人、これ
で来ると思う？」
梨花 「うーん、地味すぎるかも」
麻友 「なんか、もつと楽しそう！って感じが
欲しいね」
梨花 「看板は文字だけでなく、絵とか入れた

楓 「そうよね、盆栽の絵とか、入れる？」
 梨花 「イラストお願い！」
 麻友 「しまったら。キラキラ系の」
 間のキャラにするの？」得意だけど。人
 さらさらと書き始める麻友。
 梨花、楓、「うわー」さすがアニメシ
 ョン学科卒」と口々にほめる。ふたりが
 意見を言い合い、キャラを煮詰めて描い
 ていく麻友。だんだんできあがるキャラ
 の絵。梨花、これでコスプレしてく
 れる？」
 梨花 「ほう、時間ないけど、やるか！」
 楓 「楓が必死に頼むなんてあんまりないよ
 ね」
 麻友 「何でも手伝うよ」
 梨花 「へたれな私だけ」
 楓 「楓はやれる、大丈夫！」

40 初夏の強い日差しの中にすくと立つ稲

41 耕吉の家・仏間

蝉しぐれが聞こえる。
 二間続きの仏間は開け放され、扇風機が
 まわっている。麻友、楓が首にタオルをかけ、汗をぬぐ
 いながら、看板用の大きな絵やキャラの
 絵を仕上げている。梨花はコスプレの衣装を着てチェックし
 ている。そこへ井上が「おつかれ」と、コンビ
 ニの袋を持って入ってくる。梨花がその中から「あ、サンキュ」と、
 「クリッシュ」のようなアイスを取り
 出す。

梨花「あんたもなんか手伝ってよ」
井上「オレ、何かしたくないの」
梨花「警備とか、車の誘導とか」
井上「じゃ、明日、車両係ね」
梨花「もう、これ」
井上「松っばい方が」

と、松の写真をしながら体をひねり考える。

楓「井上が大きな用紙を持ち上げようとして、井上、あ、少し頭を下げる。」

42 盆栽センター・事務所・前（夕）

和泉「和泉がカギを締めている時、井上が帰ってくる。」

井上「おつかれ、あつちはどう？」

和泉「そうか、楓ちゃんがんばるな。井上、飯まだか、たまには一緒に食おう」

井上「いいですけど」

43 定食屋・内（夜）

和泉「和泉と井上、生姜焼き定食を食べながら。」

井上「別に」
和泉「いや、ほんと、は東京から来てすぐイヤんなるかと思つたよ」

井上「茨城です」
和泉「地元には彼女とかいるのか」
井上「はい、せん。：：：つうか、ずっといたことないし」

和泉「なる。落ちてくるものを吹き出しそうに」

井上「に」
和泉「なる。落ちてくるものを吹き出しそうに」
井上「なんか面倒で。他人が部屋とか来るの」

和泉「イヤなんですよね」
和泉「わかんなさ。俺らのときなんか、な
んとか部屋に……。つてか、なんでイヤな
の」
井上「こう、自分の領域がおかされるみたい
で。自分、ちよつと潔癖症のところあつ
て、ひとりの方が気楽です」
和泉「楓ちゃんは？」
井上「（顔をあげ）えっ？……。親切、かな。で
も、こっちは半人前だし、そんな感じじ
やないでしょ」
和泉「どうして」
井上「……（茨城弁で）オレ、人を好きにな
るって、よくわからねえべ」
和泉「いいと思うんだけどなあ……。ま、どう
せ地元に戻るか」
井上「……」

44 耕吉の家・仏間（夜）

作品は完成している。
やり切った楓、麻友、梨花が畳に倒れ込
んでいゝ。
麻友「おわたさ」
楓「ありがとう、みんな」
梨花「明日MCでしょ。自信もってやろ
うね」
楓「うん」
隣のテレビから「明日の降水確率は四
十%です」の流れていゝ。
三人、疲れて、だれも気にとめない。

45 盆栽研究所・井上の部屋（夜）

井上、窓を開け心配そうに空模様を眺め
る。
くもった暗く重い空。

46 盆栽センター・全景

『盆栽フェスティバル』の看板。
くもり空で今にも雨が落ちそう。

駐。車。場。奥。に。朝。礼。台。の。よ。う。な。小。さ。な。ス。テ。ー。ジ。作。ら。れ、。ス。タ。ン。ド。マ。イ。ク。が。設。置。さ。れ。て。い。る。進。行。表。の。看。板。に「BONSAI」と書かれ
 た。キ。ャ。ラ。ク。タ。ー。が。入。っ。た。看。板。な。ど。が。あ。り。メ。イ。ン。会。場。と。な。っ。て。い。る。シ。ン。ボ。ル。的。に。置。か。れ。て。い。る。楓。は。胸。に『平星』と書かれた赤い胸章リ
 ボンをつつけ、「主催者」の紙が貼られた席
 に座っている。となりには和泉も。ほかに麻友とコスプレした梨花、盆栽の
 先生二人とハッピ姿の関係者が三人。少
 し離れて博と優子、井上。客はだれも
 いない。楓がスマホをみると十時の表示。
 和泉を見て、「うん」とうなずくと、ステ
 ージのぼり、左の腕をしきりにかきな
 がらマイクを持つと、キーンと音が鳴る。
 楓がマイクを持つと、井上がスピーカ
 ーを調整する。誘導灯もった車両係の
 楓、ふたたびマイクを持つ。楓、
 ー（か細い声で）今日は、お忙しい中をお
 越し。また、盆裁フェスティバルを始
 めます。空からぼつぼつと雨が降って、楓の顔を
 ぬらす。楓、空を見上げ、それをぬぐう。
 優子と博が心配そうに楓を見つめている。
 ー「たくさん楽しんでください。用意して
 います。願。い。し。ま。す。左。の。腕。を。か。き。つ。つ。ス。テ。ー
 と。頭。を。下。げ、。ジ。を。降。り。る。板。つ。ぶ。が。だ。ん。だ。ん。の。看。板。が。濡。れ。て、。雨。を。降。り。る。板。つ。ぶ。が。だ。ん。だ。ん。の。看。板。が。濡。れ。て、。そ。ん。で。い。く。わ。て。て。関。係。者。た。ち。が。建。物。の。中。に。

楓

楓

「主催者席」に楓。ステージ近くには和泉、梨花、麻友、関係者たち。十人あまりのお客さんたち。優子と博、井上。少し、遠くに優子と博、井上。楓が和泉にうながされステージに上がり、マイクを持つ。て今日は忙しい中、たくさんの方に来て、ご協力いただきありがとうございます。本当にありがとうございます。鬼無町を中心にますます盆栽が盛んに町鬼無町を願っています。盆裁が盛んになるように願っています。楓はお辞儀をして、ステージを降りようとする。まばらな拍手が起きる。そのとき大きな声で

楓

井上 「ビーオーエヌエスエイ B O N S A I ボンサイ」

楓 「（腹からの声で） B O N S A I ボンサイ！」

と、左の手のこぶしを上げる。大きな拍手が起きる。楓、笑顔でステージを降りる。麻友と梨花が笑顔で駆け寄り、梨花「すごい、楓はヘタレじゃないよ」優子「少し離れたところ、」博「たくましくなつて、」和泉の笑顔、関係者たちの笑顔、そして井上の笑顔。

51 県立中央病院・外観

52 同・病室・内

楓 耕吉がベッドを起こし雑誌を見ている。「おじいちゃん、元気になった？」

耕吉「わしは元気だ。(首元を指差し)ここにヘルスメーターが入ってるんだ、見る

か？」

楓「いいよ」

耕吉「これであと十年はいけるらしい」

楓「大丈夫、おじいちゃんは百まで生きる

から」

耕吉「百かー、ははは。ところで楓、この間

はありがとう」

楓「いろいろあったけど、なんとか終わっ

た」

耕吉「お前は責任感が強い。やるときはやる、

わしの孫だ」

楓「ふふ、それは間違いない」

耕吉「正直、わしも一瞬、もうだめかと思っ

た。楓、好きなように生きる。やりた

いことがあったら存分にやれ、命を燃やし

て生きるんだ」

楓「うん。わかった」

耕吉「楓はなんでもできる。わしはもう燃え

尽きるだけや」

楓「とかいって、また、イベントしたいと

か言い出すんでしょ」

耕吉「ははは」

ふたりで笑い合う。

53 同・同・外の廊下

スマホを耳にあてながら楓が病室から出

てくる。

楓「はい」

54 如意輪寺公園・前の坂く見晴らし台(夕)

ひぐらしの鳴き声。

楓が坂を小走りに、それからだんだん早

く息を切らせて駆け上がる。

のぼり切って「！」という楓の顔。

そこにいたのは植えてある松の姿を自分

の体で真似している井上の姿。

55 同・見晴らし台(夕)

た夏空が広がっている。

(ペラで換算すると100枚終わりです)